

相模湾から初記録の センカエルウオ *Istiblennius lineatus* (Valenciennes)

萩原清司*

First record of *Istiblennius lineatus*
(Valenciennes) from the Sagami Bay

Kiyoshi HAGIWARA *

キーワード: 魚類, 分布, イソギンボ科, 無効分散,
北限記録

Key words: fish, distribution, Blenniidae,
invalidated dispersion, northern limit
record

センカエルウオ *Istiblennius lineatus* (Valenciennes) はイソギンボ科カエルウオ属の魚類で、本属は腹鰭が1棘3軟条であること、臀鰭後端の鰭膜は発達せず尾柄部とほとんどつながらない等の特徴を有する。同属魚類は日本沿岸から本種のほか、カエルウオ *I. enosimae* (Jordan and Snyder), カエルウオモドキ *I. dussumieri* (Valenciennes), ニセカエルウオ *I. edentulus* (Forster and Schneider) の4種が知られ、いずれもインド・太平洋の熱帯・亜熱帯域に分布している (藍澤・土居内, 2013)。これまで Senou *et al.* (2006) の定義による相模湾からは、本属魚類としてカエルウオのみが報告されており、他種についての記録はなかった (本田ほか, 2024)。この度、三浦半島の相模湾岸に位置する横須賀市佐島の横須賀市自然・人文博物館付属天神島臨海自然教育園において相模湾初記録となるセンカエルウオ標本が収集されたため、ここに報告する。採集地点の水温計測には棒温度計を用い、標本の計測方法は Springer and Gomon (1975) に従い、魚類の同定は藍澤・土居内 (2013) に従った。標本の計測にはノギスを用い、脊椎骨数及び鰭条数の観察には軟X線写真を用いた。生鮮時

の色彩は固定前の個体の目視観察に基づく。

尚、供試標本は横須賀市博物館魚類資料 (YCM-P) として登録・保存した。

採集状況

供試標本 (YCM-P47175) は2024年11月26日の朝、潮位高140 cmの高潮位にあるタイドプール内で斃死しており、外傷は確認できなかった。気象庁によると近隣の三浦市では前日の23時に気温が7.1℃まで低下し (気象庁, 2024)、供試標本の収集時のタイドプール水温は7.8℃であった。

材 料

センカエルウオ *Istiblennius lineatus* (Valenciennes, 1836)

標本: YCM-P47175 (第1図): 神奈川県横須賀市佐島、天神島臨海自然教育園 (島内西端の高潮位タイドプール: 35°13'18"N, 139°36'04"E; 第2図), 20241126, 死骸拾得, 萩原清司収集。

記 載

各部位の計測値 (mm): 全長61.1, 標準体長52.9, 頭長11.9, 腹鰭基底部における体高8.9, 臀鰭始部における体高8.1, 体幅6.2, 尾柄長3.5, 尾柄高4.6, 胸鰭長9.6, 腹鰭長6.4, 尾鰭長7.6, 背鰭前長10.9, 臀鰭前長25.1, 吻長2.8, 眼径3.1, 両眼間隔1.6。標準体長に対する各部位の比率 (%): 全長115.5, 頭長22.5, 腹鰭基底部における体高16.8, 臀鰭始部における体高15.3, 体幅11.7, 尾柄長6.6, 尾柄高8.7, 胸鰭長18.1, 腹鰭長12.1, 尾鰭長14.4, 背鰭前長20.6, 臀鰭前長47.4。頭長に対する各部位の比率 (%): 吻長23.5, 眼径26.1, 両眼間隔13.4。

各部位の計数値: 背鰭条数 XIII, 22, 臀鰭条数 II, 23, 胸鰭軟条数 14, 腹鰭条数 I, 3, 尾鰭分節軟条数 6+6=12, 脊椎骨数 12+28=24。

形態: 体は後半で側扁する円筒形で鱗はない。口は亜端位で吻は丸い。体高は腹鰭基部で最大。口は

* 横須賀市自然・人文博物館 〒238-0016 神奈川県横須賀市深田台95

原稿受付 2024年11月25日 横須賀市博物館業績801号

Corresponding author: Kiyoshi HAGIWARA, k-hagiwara@jcom.home.ne.jp



第1図 YCM-P47175 センカエルウオ *Istiblennius lineatus* (Valenciennes) 固定標本写真.

亜端位で、上顎が下顎より突出する。上唇は肥厚する。吻長は眼径より僅かに小さい。眼は頭部背縁に位置し、円形。両眼間隔は狭い。眼上皮弁は掌状に分枝し、鼻皮弁は分岐する。側線は背鰭中央部直下に達しない。

拾得時の色彩：体は灰褐色で、不規則な暗色の横帯を有する。体側には明瞭な暗色縦線が6本あり、尾柄付近では小点列となる。眼より前方の頭部は黒ずむ。眼の後方に3本、胸鰭基部に1本の暗色横帯がある。背鰭軟条部には暗色の斜線がある。

日本産同属他種との比較

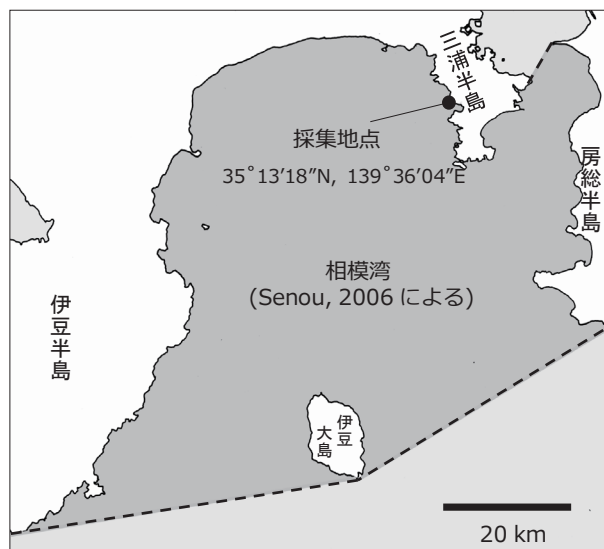
以下に日本産同属他種との比較について述べる。

カエルウオ属は計数形質において、各種を明確に区別するに至る差異は認められないが、外部形態と斑紋には次のような差異が認められる。センカエルウオは、側線は背鰭中央部の欠刻より前方で終わる(カエルウオ、ニセカエルウオでは欠刻より後方まで続く)、眼上皮弁は幅広く掌状に分枝する(カエルウオ、ニセカエルウオでは細長く分枝しない)、体側に明瞭な数本の暗色縦線がある(カエルウオモドキでは体側に縦線はない)、などから同属他種と区別できる(藍澤・土居内, 2013)。

考 察

センカエルウオは、これまで九州南部以南でのみ記録されており、今回の記録は本種の北限記録となる(藍澤・土居内, 2013; Motomura and Matsuura, 2010; 岩坪ほか, 2022)。

供試標本収集日の潮回りは若潮で、夜間の最高潮位が120 cm 程度であったことにより、夜間にタイ



第2図 センカエルウオ *Istiblennius lineatus* (Valenciennes) の拾得地点図.

ドプール内の海水が外海水と交換が行われず、タイドプール内の水温の急激な低下を招いたと考えられる。これによって九州南部が北限であったセンカエルウオや、相模湾周辺を分布北限とするスジクモハゼなど低水温に耐性の低い魚種が凍死に至ったものと考えられた。

筆者はこれまで、近年急激に三浦半島沿岸で増加している熱帯・亜熱帯起源と考えられる無効分散種(死滅回遊魚)の出現について報告をしてきた(萩原ほか, 2020; 萩原・瀬川, 2022; 井手籠・萩原, 2024; 萩原, 2025)が、本種の出現も地球温暖化による夏季の海水温の上昇と、2017年の夏から7年にわたる長期の黒潮の大蛇行の影響を受けているものと考えられる(海上保安庁, 2024)。今回、供試個体が11月下旬の気温7°Cほどで凍死したことから、例年1~2月をピークとして1°C前後まで低下する現地の気温の低下(横須賀市自然・人文博物館による実測値、未発表)により、気温の影響を大きく受ける高潮位のタイドプールに生息する本種の越冬は難しいと思われる、今回の本種出現は無効分散による出現と考えるのが妥当であろう。

引用文献

- 藍澤正宏・土居内龍 2013. イソギンポ科. 中坊徹次(編), 日本産魚類検索 全種の同定 第三版: 1295–1324. 東海大学出版会, 東京.
- 萩原清司・原田莉緒・石渡陽人・大島雛子・畠山葉南・多田かの 2020. 三浦半島におけるオニカマス *Sphyræna barracuda* (スズキ目; カマス科) の出現状況. 横須賀市博研報(自然), (67): 29–32.
- 萩原清司・瀬川 渉 2022. 黒潮のめぐみ—海流が運んだ生き物と文化—. 横須賀市博物館特別展示解説書, (18): 1–48.
- 萩原清司 2025. マルコバン *Trachinotus blochii* (Lacepède) の三浦半島相模湾岸からの記録. 横須賀市博研報(自然), (72): 77–80.
- 本田康介・瀬能 宏・和田英敏 2024. 相模湾産魚類目録(改訂). 神奈川県立博物館研究報告(自然科学), (53): 127–218.
- 海上保安庁 HP. 海上保安庁海洋情報部, 2024. 海洋速報&海流推測図バックナンバー. <https://www1.kaiho.mlit.go.jp/KANKYO/KAIYO/qboc/backnumber.html>. (2024年11月30日参照)
- 井手籠隼人・萩原清司 2024. 相模湾から得られた神奈川県および千葉県初記録かつ北限記録のアオモンギンポ. *Ichty*, **41**: 17–21.
- 岩坪洗樹・伊東正英・山田守彦・本村浩之(編) 2022. 薩摩半島沿岸の魚類. 329ページ. 鹿児島水圏生物博物館・鹿児島大学総合研究博物館.
- 気象庁 HP. 気象庁, 2024. 各種データ・資料. <http://www.data.jma.go.jp>. (2024年11月30日参照)
- Motomura H. and Matsuura K. ed. 2010. Fishes of Yakushima Island, A world heritage Island in the Osumi Group, Kagoshima Prefecture, Southern Japan. 264pp. National Museum of Nature and Science, Tokyo.
- Senou H., Matsuura K. and Shinohara G. 2006. Checklist of fishes in the Sagami Sea with zoogeographical comments shallow water fishes occurring along the coastlines under the influence of the Kuroshio Current. *Men. Natn. Sci. Mus.*, Tokyo, (41): 389–542.
- Springer V. G. and Gomon M. F. 1975. Revision of the blennioid fish genus *Omobranchus* with descriptions of three new species and notes on other species of the tribe Omobranchini. *Smithsonian Contributions to Zoology*, **177**: i–iii + 1–135.
- 豊田幸嗣・関慎太郎・駒井智幸 2019. 日本産淡水性・汽水性エビ・カニ図鑑. 340ページ. 緑書房.